

# オーウェルの幼年体験と文学的想像力

—— オーウェルの『1984年』体験 ——

(I)

高橋 鍾

## GEORGE ORWELL' S CHILDHOOD EXPERIENCES AND LITERARY IMAGINATION

—His Experienced *Nineteen Eighty-Four*—

(I)

TAKAHASHI Atsumu

1989年に始まった東欧諸国の民主化要求の闘いは、ソヴィエト連邦の崩壊という、誰しも予想できなかった結果を齎した。そしていま、一見、社会主義の敗北と思えなくもない歴史の渦に、時代は翻弄され流されている。その目まぐるしい渦のなかにあつて、ジョージ・オーウェルの『1984年』は、新たにどのような読み方が可能であろうか。いま改めてこのような疑問が湧いてくるのも、『1984年』の前提が崩れ去ったかのごとく、巷間、語られることが多いからである。つまり、マスコミを始め、世間一般では、ソヴィエト社会主義の消滅によって、作品に表現されている全体主義の脅威が、とりえず延期されたかのように喧伝されているからだ。<sup>1)</sup>あとは、先進資本主義諸国が協調して、ソヴィエト保守派の再登場を抑え、中国の民主化・開放政策を側面から援助すれば、自づと新しい世界秩序が生まれてくる、その他の地域紛争は、国連を中心に、各国の積極的なPKO活動への参加によって、解決が図られるだろう、かくして、二十世紀の悪夢である「全体主義」の芽は、殆どその息の根を止められつつある、というわけだ。となると、『1984年』という作品はどう考えても、その役割を終えた「警告の書」という域を出そうにもない。<sup>2)</sup>

翻つてこれまでこの小説が読み継がれてきた理由を考えてみれば、ナチズムという、人類史上、未曾有の経験を経験を教訓化する意味もあったが、なによりもまづ、一方に資本主義の諸矛盾を一身に表現するアメリカと、もう一方にスターリン主義的「社会主義」に毒されたソヴィエトという現代史的冷戦構造が前提となっていた。<sup>3)</sup> その政治状況の狭間にあつて、多くの評者は自分の政治的立場に沿つて、この小説に様々な評価を下したし、オーウェル自身、様々なレッテルが貼られ、あるときは崇められ、またあるときは貶され誇られてきた。このような我田引水的な百家争鳴は、戦後の様々な政治的・歴史の変動に影響されて起きた現象である。<sup>4)</sup>

こうした対立のなか、「社会主義」諸国では、『1984年』は無視され発禁状態に置かれていたし、資本主義体制にあつては、反社会主義の格好の宣伝材料として推奨されていた。その間、この作品が括弧抜きの社会主義と共に論じられる機会は、極めて少なかったというのが実情で

\* 本稿は、1992年度学内特別経費による共同研究プロジェクト「文学における幼年体験と自己教育」の一環として書かれたものである。

ある。確かに、この作品のなかでオーウェルの鋒先は、直接、スターリン主義的「社会主義」に向けられているが、かといって、彼が当時アメリカに代表された資本主義体制の側に立っていたということではない。彼のスターリン主義批判の背後には、常に本来あるべき社会主義を模索する姿勢が貫かれていた。<sup>5)</sup> 所謂「社会主義者」には、ファシズムが全体主義であることは自明の理である。だが、「社会主義」体制そのものが、全体主義に変質し得ることに気付く社会主義者は、当時、少なかったし、いまも少ない。オーウェルはそのことをこの作品によって社会主義者達に警告したのだ。<sup>6)</sup> このことは、真面目なオーウェル研究者であれば、誰でも気付いていたことだが、いかに真摯な研究者と雖も、大なり小なりソヴィエト連邦の現存を前提に、自らの論理を進めざるを得なかった。したがって、ソヴィエト連邦の崩壊という現実を目の当たりにした現在、どちらかの陣営に組みするような二者択一的読書方法はいうに及ばず、現代史的な文脈から読むやり方そのものが、根本的な再検討を余儀なくされている。<sup>7)</sup>

このように、旧来の政治的な解釈から離れた読み方が模索されている現在、『1984年』の成立と作家の幼年体験の関係を、もう一度きちんと検分してみることは、特に重要なことのように思える。というのも、その作業のなかで、文学作品として本来あるべきモチーフが見えてくるなら、<sup>8)</sup> この作品は歴史の変動の渦に埋没してしまうことはないはずだからである。そして、本当の意味で社会主義が、歴史的に存在したことはないという立場に立てみれば、この作品の新たな読み方と共に、オーウェルの追い求めた本来あるべき社会主義も見えてくるに違いない。

その目的地に辿りつくためには、予め大まかなその道筋を確認しておく必要がある。

『1984年』の作品世界の特徴を大雑把にまとめれば、①芸術・学問の成り立たぬ世界、②性的抑圧によって成り立つ世界、③権力維持のために権力が行使される世界、である。勿論、これより細かく分類することは可能だし(例えば、『1984年』の世界における狂気と正気の基準)、この分類では掬えない要素もあるだろう(例えば、理想郷的自然描写)、そして、これらの項目が分かちがたく溶け合って、新たな項目を設けたほうがよい場合もあるかも知れない(例えば、doublethink)。だが、ここでは論旨をはっきりさせるため、この三項目に限って個別的に論じ、その三項目の範疇を越える要素は、必要に応じて各項目のなかで言及することにする。そして、折りに触れて他の資料を利用することは勿論であるが、基本的な論の進め方は、まづ、それぞれの項目に対応する伝記的素材を、〈喜びはかくばかり〉(“Such, Such Were the Joys”)に書かれたオーウェルの回顧談から探りだすことから始める。というのも、このふたつの作品は、ほぼ同時期に書かれたらしく、『1984年』の世界の原型は、彼が八歳のとき入学したパブリック・スクール進学予備校のセント・シプリアンズ(St Cyprian’s)での生活に見ることができる、というのが大方の批評家達の意見だからである。<sup>9)</sup> 後年、オーウェル自身が回顧した、そこでの五年間の生活は、全て彼の言葉通り信じていいのかどうか、些か問題は残る。<sup>10)</sup> しかし、少なくともそこに描かれた数かずのエピソードは、実際の経験に基づいているはずであり、<sup>11)</sup> 彼の文学的感性を表現するものとして読むことも可能なはずだ。そうした手続きを経て、『1984年』の素材と作品の関係は明らかになるだろうし、作品のモチーフも見えてくるだろう。そのとき、現代史の政治状況に揉みくしゃにされた解釈から離れ、新たな読み方も見えてくるに違いない。<sup>12)</sup>

\*

まづ、芸術・学問の成立しない世界とは、どのような世界であろうか。

ウィンストン・スミス (Winston Smith) は真理省 (Ministry of Truth) に勤務し、歴史の改竄に従事している。改竄というより、ひとつの無意味な記述を、もうひとつの無意味な記述にいわれ替える仕事である。恐らくその作業の発端は、支配者の失政を糊塗するための嘘が嘘を呼んだことから始まったはずだが、『1984年』のオセアニア (Oceania) では、日日夜夜と過去の「出来事」が更新され、最早、永続的な記録はなにひとつ存在しない。真理省で処理される文書は、現実の世界となんの関係もなく、使用される統計も、現実と無関係に作りだされた情報に合わせて数字が操作されている。そこでは、なにが正しくてなにが間違っているのか、党の公式発表以外、それを判断する基準などなにひとつない。おまけに、その公式発表が、屢しば、いとも簡単に変更され、その痕跡さえあとに残らない。となると、人は判断などという認識作業を最初から諦めるだろう。例えば、これまではAの項目を正しいと認識していたにも拘らず、新たにそれと矛盾するB項を示されたら、その人のこれまでの感性総体を動員させて、AとBを比較し、判断しようとするのが極めて普通の認識作業というものだろうが、オセアニアでは、ウィンストン達、党員は、即座にA項を頭から追い払い、B項を受け入れる思考「能力」の獲得を要求されている。或るいは、A項を一方において受け入れつつ、同時にB項をも容認する「能力」(doublethink)が、時として必要とされている。

このような歴史の偽造のやり方に驚きあきれて、そこで果たされている重要な社会的機能を見過ごしてはならない。党のスローガンに曰く、「過去を支配する者は未来を支配し、現在を支配する者は過去を支配する」(NEF, p. 26) かくして、歴史の改竄そのものが自己目的化し、社会を動かしてゆく。つまり、虚偽に固められた『1984年』の世界を機能させるためには、なにひとつ「事実」が固定化されてはならず、半永久的に改竄が繰り返されなければならない。歴史の偽造の究極の目的は、増殖のための増殖という資本の論理のように、偽造のための偽造なのだ。従って、「なぜ……」という問いは愚問である。アーヴィング・ハウのいうように、「なぜ……」と問うことは、合理的な考え方をするものの陥り易い誤謬、<sup>13)</sup> といってよい。歴史的にみて、どのような種類のシステムであれ、一旦、開始されてしまえば、その社会総体が崩壊しないかぎり、その動きを止めることはないのだから……。このことが、「どのようにということは判っても、なぜかが判らない」という、ウィンストンを悩ましつづけた疑問に対するひとつの解答である。

仮に、党の正当性に疑いを抱いたとしても、恐ろしいのは、その正当性に疑いを挟んだことが発覚し、そのために処刑されるかも知れないということではない、もしかしたら、疑いを挟んだ自分が間違いで、党の方が正しいのかも知れないという消しがたい一抹の懸念に、終始、悩まされることだ。一体、 $2+2=4$  であることを、どのようにして証明できるというのだろうか (NEF, p. 62)。仮に世の中の全てが党の主張を受け入れ、 $2+2=5$  だと思いこんでいるとき、それでも4だと主張できるほどの勇気のある者が、一体、どれだけいるだろうか。いつの時代でも付和雷同が世の主流なのだ。となると、 $2+2=4$  を自分の意識のなかに閉じこめ、唯一の権威である党の公式発表に従って仕事を進めるしか道は残されていない。

だが、党の権威に疑いを抱きはじめたとしても、その文字と数字の無意味な操作に、ウィンストン自身、退屈しきっているかといえば、必ずしもそうではない。むしろ歴史の偽造の末端に関わり、自分に許される範囲内での創造性のようなものを享受している。

Winston's greatest pleasure in life was in his work. Most of it was a tedious routine, but included in it there were also jobs so difficult and intricate that you

could lose yourself in them as in the depths of mathematical problem—delicate pieces of forgery in which you had nothing to guide you except your knowledge of the principles of Ingsoc and your estimate of what the Party wanted you to say. Winston was good at this kind of thing. (NEF, pp. 33-4)

(大意——毎日の生活のなかで、最大の楽しみといえば仕事である。その殆どは退屈な繰り返しだったが、なかには非常に手の込んだ仕事もあり、それに没頭していると、高度な数学の問題を解いているような気分であった。そのような場合、イングソクの原則に照らすか、党の意向を類推する以外、なにも判断基準がなく、手際の良い改竄が要求されるのだが、ウィンストンは見事にやってのけた)

こうした安易な自己投企は、大なり小なり現代社会に巣食う病理である。自分の果たしている役割の意味を考えることなく、上から与えられた命令を黙もくと熟す感性は、なにも全体主義国家の専売特許ではない。上は政治家から下は小学生に到るまで、ここかしこに見られる、ありふれた現象だ。判断を他人に預け、上からの命令で動くことを要求する機構も亦、全体主義の一変種である。<sup>14)</sup> 或いは、命令などといういかめしい言葉を使わなくとも、上に立つ者の意向を類推し、それに沿うよう自ら積極的に行動する者まで含めれば、こうした感性から自由であると宣言できる人は、一体どれだけいるだろうか。ウィンストンもまた、党の意向に積極的に沿い、嘗て存在したこともない同志オギルヴィー (Ogilvy) という死者を捏造し、現在の党の方針との整合性を案出してみせた (NEF, pp. 36-7)。そのときの彼の満足感は、嘗てスターリンの压制下、一枚の写真からもの見事に、トロツキー達、「人民の敵」を抹消してみせた、忠実なる写真技術者のそれに匹敵するだろう。<sup>15)</sup> どのような、たとえ奴隷のする労働であろうと、それなりの創造性が要求され、それなりの満足感が得られるものなのだ。

さらに真理省では、公用語ニュースピーク (Newspeak) の辞書が編纂されている。その目指すところは、自由にものを考える余地をなくし、非正統的な考え方が表現できないように語彙を制限することにある。そのためには、ひとつの概念はひとつの単語だけで表現され、その他に付随する意味は全て削りとられる必要がある。ここでも「なんのため……」という疑問は不要だ。どのような体制であれ、自らの存在事由を否定するような思想を、極力、その文化的・教育的システムから排除しようとする。それが体制の本能というものだ。<sup>16)</sup> 一見したところ、ひとつの単語がひとつの概念しか意味しないということは、お互いのコミュニケーションに誤解を生じなくて、所謂「国際化」の現代に相応しいように思えるかも知れない。まして、外国語として英語を学ぶ身にとって、例えば、ask/question/inquireなどと、同じような意味の単語を覚えさせられるより、ask一語で済ませて貰えれば、苦労は1/3で済む。<sup>17)</sup> 更に、“The Principles of Newspeak”で提起されているように、接頭語の‘un-’を多用することによって、badという語の代わりに ungood を使うとなると、その法則性を覚えればいいわけだから、これまた外国語として英語を学ぶ者には好都合に思える。不規則動詞を全て廃し、‘-ed’を付けるとか、複数形は‘-s’を付けるだけでよいとか、そして、形容詞の比較級・最上級も、不規則変化や more, most を廃して、全て‘-er, -est’に統一する (NEF, pp. 233-4) となると、便利さを通りこして合理的にさえ思える。しかし、形態論からは合理的に見えるかも知れないが、社会言語学の視点から見れば、ことはただ、便利だ、合理的だ、で済む問題ではなさそうだ。

例えば、オセアニアでは、「平和」という語句は、恒常的な戦争状態を意味する。戦争と平和という相対立する語句が同じ意味だなどといわれれば、端から我われは、そこで、通常の意

味での対話が不可能であろうことを予感してしまう。だが、普通一般に考えられるほど、この考えが支離滅裂というわけでもない。というのも、恐らく誰に聞いてみたところで、少なくとも正面切って「平和」を否定し、戦争を礼賛する人はいないだろう。それにも拘らず、この地上から争いがなくならないのは、なにも平和を口にしながら陰で兵器を売りさばく死の商人がいるからという理由だけではない。冷戦時代の終結という、嘗てない国際「協調」の時代にあつて、依然、この地上から争いがなくならないのは、「平和」という語句の意味に、湾岸戦争当時のブッシュ（Bush）大統領とフセイン（Hussein）大統領の主張にあるほどではないにしても、その語句を使う人の個人的背景——歴史的・政治的立場——によって、様々な違いがあるからだ。もし、「平和」という語句の意味が、少なくともぼくの使う意味で統一されれば、戦争など起きないという気がしないでもないが、ことはさほど簡単ではない。この世界に轟めく想像もできない利害関係を考えれば、高だかぼくの思い描く「平和」のイメージでさえ、それを実現するとなると、多大の抑圧と暴力を必要とするだろう。まして、ブッシュ大統領の描く「平和」、フセイン大統領の主張する「平和」を実現するためには、なによりもまづ軍隊という暴力装置を必要とし、自らの「平和」に敵対する勢力を撃破しなければならない。かくして、「平和」には常に戦争が内在する、という奇妙な命題が成り立つ。オセアニアで叫ばれる三つのスローガンのうちのひとつ“WAR IS PEACE”は、このようにして我われの日常感覚に、矛盾なく入りこんでくるのだ。<sup>18)</sup>

このように、万人皆等しく「平和」の概念を画一化するためには、想像を絶する弾圧・抑圧を伴うのだが、『1984年』のオセアニアでは、既にその段階を越えて、言語形態の単純化・言葉の無力化が着々と進行しつつある。その生成の特徴は語彙の減少化である。

…the Newspeak vocabulary was tiny, and new ways of reducing it were constantly being devised. Newspeak, indeed, differed from most all other languages in that its vocabulary grew smaller instead of larger every year. Each reduction was a gain, since the smaller the area of choice, the smaller the temptation to take thought. Ultimately it was hoped to make articulate speech issue from the larynx without involving the higher brain centres at all. (NEF, p. 238)

（大意——ニュースピークで使われる語彙は、常に縮小が図られていた。一般的にあって、言語は時間の経過とともにその語彙を増加させるものだが、ニュースピークの場合、年毎に語彙が減少している。そして、その減少は革命の成果と見なされていた。というのも、語彙の選択の幅が小さくなれば、ものを考えてみたいという欲求も、それだけ少なくなるからだ。更にそこに留まらず、高度な頭脳組織を使わないで、直接、発声器官から有節言語を発することが望まれていた）

かくして、語彙の減少は年毎に進み、それにつれて意識的な思考の領域は益ます狭まり、思想犯罪の可能性・余地もどんどんなくなってゆく。このように『1984年』の世界では、語彙を減少させる推進力が働いているのだが、<sup>19)</sup> ことは語彙の問題に留まらない。それはまた、前述のように社会言語学の問題を提起する。というのも、言語の歴史的・文化的側面を排除し、政治的・経済的に無力化してしまおうというのが、権力側の意図だからである。例えば、“All mans are equal”という文章はニュースピークでも文法的に可能であるが、それは概念的に明白な誤謬を表現している。即ち、“equal”から政治的平等の概念がとり除かれた場合、その文章は「全ての人は同じ背格好である」とか「同じ体重である」、あるいは「同じ体力を保持している」等の意味にしかならないからだ (NEF, p. 239)。そこで進行する言葉の意味・

概念の画一化・単純化は、そこにどんなに複雑な思考過程が伴ってしようとも、表出される言語形態は画一的で、単純なものにならざるを得ない。というより、権力を永続化するため、複雑な思考過程を媒介するはずの言語を予め単純化することにより、思考そのものの単純化・無力化が謀られているというべきかも知れない。なぜなら、ものを考える能力があるということは、他人の言葉を疑ってみる能力があるということであり、将来、それが党の公式発表に対する懐疑的・反抗的態度に発展する可能性を秘めていることになる。だからこそ、永遠の権力を持続させるためには、被支配者からもものを考える能力を奪う必要があるのだ。

しかし、ごく一般的に考えて、単純な表現形態は単純な思考の表出でしかない、などとは必ずしもいえないが、画一的な管理社会に搦めとられた感性の作りだす単純な表現形態は、必然的に単純な思考の表出となる。例えば、いかに感動的な体験をしようとも、「すごい」という形容詞しか使えないとしたら、話し相手にその感動を伝えることができないだけではない。表現するための言葉が見つからないとき、あるいは言葉で自分の気持ちがうまく表現できないとき、人は屢しば苛立ち、暴力的になる。社会全体が、自己表現を抑圧されたたすると、その社会は集団ヒステリーに陥らざるを得ない。『1984年』のオセアニアがまさにその集団ヒステリーの世界なのだ。翻って失語症の時代ともいべき現代社会を考える場合、「嘘!」「本当?」「別に……」という決まり文句しか喋らない若者達、「どうも……」という語句で、挨拶・謝礼・謝罪等の言葉を全て済ましてしまう大人達、これらの現象は、益ます陰湿化するいじめの問題だけでなく、他者に対する思い遣りを忘れて、社会全体が我も我もと私利私欲に走る集団ヒステリーの、社会言語学的表現といえないであろうか。

失語症的現代社会であれ、『1984年』のオセアニアであれ、世の大勢（あるいは体制）に順応する精神から、学問・芸術が発展する余地はない。学問・芸術の根幹である想像力・創造力は、なによりもまづ、対象を視る固有の眼——ときとして対象を批判する眼を必要とするのだ。自分自身の眼で視るのではなく、他者の眼に順応するのであれば、その精神は学問・芸術活動にとって致命的である。しかし、学問・芸術に想像力・創造力が必要であることは、誰も否定しがたい事実であるとしても、その想像力・創造力を育てることに、社会や教育が寄与しているかどうかは別問題である。まして、全体主義体制のもとで、学問も芸術も育たないことは容易に推測されようが、教育=学力という一元的価値観に支配されている社会もまた、一種の全体主義であることに、案外、気付く人は少ない。

芸術・学問を拒絶する世界は、なにもフィクションの世界だけではない。オーウェル自身が八才のときから五年間を過ごしたセント・シプリアンズにおいても、想像力・創造力を無視した教育が、我が物顔にまかり通っていた。そこででの生活が、余程、印象的だったらしく、前述のように、後年、〈喜びはかくばかり〉のなかで、菌に衣着せぬ批判を交えながら回顧することになる。

セント・シプリアンズはパブリック・スクールに入るための進学準備校であるから、そこで受験科目中心の教育がおこなわれるのは当然、と考える向きもあるかも知れない。だが、オーウェルの在学していた当時、他の多くの進学準備校において、全てを点数で評価するようなものの見方が生徒達に教えられ、学校全体を支配していたわけではない。形振り構わず点数至上主義に子供達を駆りたてるセント・シプリアンズの遣り方は、一種、特異な存在であった。そこで行われる受験勉強の凄まじさは、クリスマスに備えて詰め込み飼育される七面鳥の比喻で語られている。<sup>20)</sup> ぼく達はその形態を想像する場合、現在の日本の受験校の詰め込み教育を

考えてもそう間違いはないが、ただ、エリック・ブレア (Eric Blair : オーウェルの本名) の場合、古典専攻であり、ひとつの学年に十数人しかいない奨学生を目指していたから、その主要受験科目は、ラテン語・ギリシャ語・フランス語・歴史という違いはある。地理、数学の授業も行われたが、全く御座成りで、自然科学系の学科に到っては、授業科目として設定さえされていない。ラテン語・ギリシャ語にしろ、現在のわが国の受験英語と同じで、ある作家の著作を一冊でも読みとおすことなどなく、やたら無関係な短い文章を読まされ、文法事項、単語、イディオムを徹底的に叩きこまれるだけだ。おまけに、最後の年は、これまでの入学試験に出題された問題を解くことに、大半の時間を費やすとなると、どこか日本の進学校とそっくりの様相を呈してくる。出来事と年号の無意味な結び付きを強要する歴史の受験勉強など、現在の日本の進学校の歴史教育を、そっくりそのまま髣髴させる。そうした激烈な競争試験のなかで通用する唯一の価値は、「(奨学生) 試験に通ること」である。そのためには、他のことは全て犠牲にされなければならない。もし受験に失敗すれば、それは自業自得であり、自分が一生懸命に勉強しなかったから、罰があたったと思いきまされる。セント・シプリアnzのある生徒は、試験に通らなかつたから、校長から鞭打ちの刑を受けるのは当然と考えた。<sup>21)</sup>

そればかりではない、受験勉強以外は全て二義的な意味しかもたない学校では、子供心に、本当に望むこと・やりたいことは、必ず邪魔が入り達成できないという確信を植えつけてしまう。勿論、セント・シプリアnzでの生活の全てが全て、砂を噛むように味気ないものであったわけではない。受験科目に関係ない、人間味溢れる教師もいたし、時には夏の午後、遠くまで散歩に出掛けることもあった、さらに夏の黄昏時、遅くまでうろつき回ったりスイミングプールに飛びこんでも、普段のように怒られることもなかつた。そして、朝早く目覚めたら、一時間位、誰にも邪魔されず自分の好きな読書に耽ることもあった。だが、こうした楽しい時間は永遠につづくものではなく、常に教師の呼び声によって辛い現実によび戻される。それは束の間の自由を与えられた犬のようなもので、革ひもをぐいと引かれたら、楽しい時間はそれで終わりというわけだ。<sup>22)</sup> 楽しいことのあとには必ず苦しいことがまち構えているという確信は、子供達に自らの未来を悲観させ、人生とは自分の夢を棚上げし、辛いことに耐えることだと思わせかねない。人生は楽しいものとして、未来は洋ようたるものとして、子供心に思い描かせないとしたら、その教育は失敗したというべきだ。

子供達に、全てを試験の点数に結びつけて考えることを教え、実際以上にものを知っているかのような印象を試験官に与えるための勉強をさせ、その他のことは全て犠牲にして、ひたすら試験に合格することを目指させる。このような受験勉強の遣り方は、言葉を替えていえば、一種の信用詐欺 (confidence trick) を、教育の名のもとに奨励しているようなものだ。ここではものを考える習慣など二の次であり、受験に役立たない思考力など、有害と見做されかねない。<sup>23)</sup> そうした風潮は、『1984年』の世界で「科学」という語彙だけでなく、科学的思考方法が消滅していった経緯を推測させる。

...there was no vocabulary expressing the function of Science as a habit of mind, or a method of thought, irrespective of its particular branches. There was, indeed, no word for 'Science', any meaning that it could possibly bear being already sufficiently covered by the word Ingsoc. (NEF, p. 239)

(大意——細ごました特別な部門を度外視すれば、思考方法として、科学の役割を表現する語彙はなにひとつない。そもそも「科学」を意味する言葉がないのだ。つまり、その言葉が最大限もっている

いかなる意味も、イングソックという言葉に、既に充分、包含されいるのだ)

科学的思考とはどういう思考方法をいうのか、ここでその説明をしようとすれば、膨大な紙数を費やすことになるだろう。しかし、「科学」が辞書的な意味において、「世界・事象に関する知的・合理的な探求の営み」<sup>24)</sup>であると定義されるとき、そこには最低限、物事を考え、理解し、判断する能力が前提となっている。つまり、試行錯誤を経験しながら、目のまえにあるものを、批判的に視るとはいわないまでも、自分の眼で視ようとする意志が要求されている。セント・シプリアンズでは、自分の眼で視ることなど重要視されていない。それどころか、殆ど禁じられたも同然である。ひたすら学校の敷いた路線を進むことが強いられ、それから逸脱した場合、前述のように、罪の意識さえ感じさせられる、そこから落伍するのも生徒自身の自業自得というわけだ。つまり、正統から逸脱した異端の心情である。

学校に限らず、どの世界にも「正統」と称する権威が存在する。正統とは無意識な思考形式であり、無意識な思考形式とは、公に認められた見解を機械的に受け入れ、そのまま口移しに喋ることのできる能力のことである。<sup>25)</sup> こういう一元的な価値観に支配される世界では、芸術・学問に必要な創造力（或いは想像力）は育たない。創造力の源は、現在、目のまえにあるものを、自分の眼で視ようとする意志から始まるはずだ。セント・シプリアンズの五年間は、子供の想像力・創造力の芽を抑え、ひたすら「正統」的な答えに順応させるための訓練の場であり、パブリック・スクールの奨学生試験は、どの程度、その正統に順応しているかを計る儀式でしかなかった。

二番目の性の問題に関して、〈喜びはかくばかり〉に、その原型が豊富に見られるというわけではない。唯一そこで問題になっているのは、マスターベーションである。十二歳の頃、学内のあるグループにその「悪い風潮」が流行ったらしい。学校当局は子供達を一堂に集め、直接その罪の内容を口にする事なく、「肉体の聖堂を汚す行為」といういい方で審問を開始した。エリックは問題の所在を具体的に理解できないまま、恐らく自分のペニス時折り自然に勃起することが、教師達のいう罪だろうと推測する。学内の性的秩序を乱したと思しき中心的な人物が、次つぎと別室に呼ばれて尋問され、そこで鞭打たれる声や音が、他の子供達の耳に聞こえてくる。その声を聞きながら、教師は一渡り子供達の顔を眺め、それからエリックに厳しい目を向ける。まるでその凝視は、「おまえも同罪だ。自分のしたことはよく判っているだろう」と問い詰めているかのようだ。彼は犯してもいない罪を認めさせられ、その罪の意識にうち拉がれ、恥ずかしさに駆られて俯く。<sup>26)</sup>

このように子供の性的欲求を抑圧し、そのエネルギーを勉学へ、あるいはスポーツへと向けさせるのは、学校教育の常套手段である。だが、性的な事柄に罪の意識を植えつけるということは、極論すれば性的不感症を奨励することだ。『1984年』の世界も、性は子供を産むという目的に於て認められるだけで、性的欲望は思想犯罪と見做される。その世界では、子供は人工受精によって生まれることが理想とされているが、その理想に向けて過渡期にあるため、結婚が許されていない訳ではない。しかし、結婚を許されるにしても性欲は否定され、専ら党に奉仕させるために子供を生むことが奨励されている。ウィンストンの嘗ての妻であるキャサリン(Katharin)は、性行為を「子作り」といい、「党への義務」といつていた。彼女は、謂わば党の催眠術的な力によって、永久に不感症の烙印を押され、互いに相手を求め、協力してオルガスムスに到達しようという性愛から無縁の存在であった。



全く個人的な領域が欠如しているという事実は、『1984年』で強調されているひとつの特徴である。<sup>27)</sup> 全く個人的な領域に属し、公権力にとってどうでもよい事柄であるはずの性的欲求まで、党は支配・管理しようとする。その訳は、支配する側の本能として、自らを滅ぼしかねない危険性が、常に支配される側の密やかな私的領域にあることを嗅ぎとっているからだ。

Not merely the love of one person but the animal instinct, the simple undifferentiated desire : that was the force that would tear the Party to pieces.  
(NEF, p. 97.)

(大意——愛という感情だけでなく、単なる未分化の欲望である動物的本能は、党を根底から崩壊せしめるエネルギーを秘めている)

異性愛、家族愛、或いは友情など、個人と個人の関係に基づいた感情に、本来、公権力が入りこめる余地はない。しかし、『1984年』のオセアニアでは、権力の及ばぬ私的領域まで、支配者は忍びこむことに半ば成功しているように思える。つまり、少なくとも被支配者の意識領域を、ビッグ・ブラザー (Big Brother) に対する敬愛の念で塗りつぶすことに成功しているのだ。そうした謂わば支配者の捏造した「私的」感情を、被支配者の脳裏にインプットするためには、歴史・文化・教育・政治・経済など、ありとあらゆる分野にはり巡らされた、思考方法のマニュアルが必要となってくる。思考方法のマニュアルとは、二重思考の習慣の獲得と同義である。即ち、党の公式発表が発せられるまえにそれを類推し、それに自らの思考をより添わせる能力のことだ。それと同時に、自分の信じていた見解と相反する意向が党によって示されたら、なんの矛盾も感ずることなく自分の見解を捨て、直ちに党の公式発表へのり換える能力のことでもある。そうした二重思考を組みこむために、党は屢しば個人の識閥を越えて、思考習慣の環境設定に干渉しようと試みてくる。だが、私的領域に潜む原初的欲求が抑えつけられれば、時として人間の識閥の奥深くから、臨界点を越えて暴発することがあるだろう。流石にそこまで権力も制御できず、定期的にその動物的衝動を発散させる必要がある。所謂、“Two Minutes Hate” と呼ばれ、まるでラジオ体操のように、日毎、繰り返される集会も、この得体の知れぬ未分化の欲求の支配管理が難しいことを、公権力自ら認めている証左である。

It was not merely that the sex instinct created a world of its own which was outside the Party's control and which therefore had to be destroyed if possible. What was more important was that sexual privation induced hysteria, which was desirable because it could be transformed into war-fever and leader-worship.  
(NEF, p. 102)

(大意——性本能は、党の統制を離れているが故に、可能ならば破壊されるべき小世界を造っている。更に重要なことは、性的欠乏状態がヒステリーを誘引する事実である。そして、戦争熱や指導者の個人崇拜に転化できるという意味で、そのヒステリーは望ましいものなのだ)

下層階級 (Prole) にウィンストンが未来の希望を託すのも、彼らのもつ未分化の欲求の強さに期待したからだ。下層階級の反乱などありえないというオブライエン (O'Brien) の主張を受けいれるとしても、人間としての品性とお互いの共感という、彼らの本能的な価値基準は、依然として健在だ。<sup>28)</sup> ジュリア (Julia) を裏切ったあとでさえ、オブライエンはウィンストンの母親の自己犠牲的な愛の記憶を消すことができない。その事実は、ヴァレリー・マイヤーズのいうように、ジュリアとの情事が人間的な愛の持続を象徴しているかどうかは別として、下層階級の本能的な同胞意識 (主として、母親の子供に対する愛情) が、些かも汚され

ていないことを示している。<sup>29)</sup> ウィンストンの敗北によって、最終的にそのことが否定された訳ではない。支配者達もそのことに気付いていたからこそ、一見、個人的な領域に属するように見える、性的欲求にまで支配・管理の手を伸ばそうとするのだ。かくして、オセアニアでは未分化の衝動を裡に秘めた性的欲求は、国家支配に亀裂を齎す思想犯と見なされる。

このような党による性の管理は、集団ヒステリーを生じさせ、戦争熱・支配者崇拝へとすり替える、大衆支配の重要な装置となる。従って、性的欲望に基づいた男女の結びつきを求めることは、党に対する反逆行為であり、オルガスムスは党に対する勝利、というウィンストンの認識が生まれてくる。彼とジュリアの性行為には、全体主義国家の片隅で思想警察の目を掠めて繰りひろげられる、男女のラヴロマンスではなく、政治的行為としての意味が付与されているのだ。<sup>30)</sup>

In the old days, ... a man looked at a girl's body and saw that it was desirable, ... But you could not have pure love or pure lust nowadays. No emotion was pure, because everything was mixed up with fear and hatred. Their embrace had been a battle, the climax a victory. It was a blow struck against the Party. It was a political act. (NEF. p. 97)

(大意——嘗ては男が女の身体を眺め、欲情を催した…。ところが昨今は、純粋な愛とか純粋な欲情をもつことなど不可能である。あらゆるものが恐怖と憎悪に塗れ、純粋な感情など、どこにもない。ウィンストンとジュリアの抱擁は〔党に対する〕闘争であり、そのクライマックスは勝利であった。それは党に打撃を与える政治的行為であった)

だが、ウィンストンに直接的な勝利など望むべくもない。党に対しなんらかの勝利があるとなれば、それは何世代にも亘って周りの狂気から遁れ、生き残るかも知れない正気に、自らの正気を伝えることぐらいのものだ。彼自身、過去のいかなる記録も全て改竄されている時代のなかで、自らの正当性を証明するものなど、あやふやな記憶以外、なにひとつ見出し得ない。過去の記録のなかから、なんでもいい、なにか自分の正気を確信させるものがあれば、どんなに勇気づけられることだろう。孤独な未来の正気を勇気づけるために、彼の日記は書かれなければならない。もしこの微かな正気を未来に伝えうるならば、それが党に対する彼の勝利なのだ。それぐらいのことなら、ひよとすると可能であるかも知れない。だが、彼が信じようとするその可能性でさえ、絶望的なまでに不確かなものだ。それにも拘らず、党に宣戦布告した時点で、その可能性に賭ける以外になく、自らが未来のために犠牲になるのは当然と考えようとする。自分がその闘いの過程で死すとも、変革の意志(狂気に囲まれた正気)を、世代から世代へと伝える礎となるなら、それが巨大な党権力に対する、一個人の勝利なのだ。テレスクリーンの陰で密かに始めた日記も、誰かに、直接、読ませるためではなく、遠い未来の正気に送られるメッセージとして、ウィンストンには夢想されている。

ところで、ウィンストンの描いた反逆の構図も、ジュリアには理解できないし、興味もない。彼女は党に対する反逆などという、大それたことを考えているわけではない。ただ、できるだけ長く思想警察の眼を誤魔化して、ウィンストンとの情事を愉しみたいだけだ。<sup>31)</sup> このようなジュリアにさえ、党権力は容赦はしないし、彼女の生き方の裡に反逆の芽を読みとっている。確かに、彼女が意識するしないに拘らず、男と女の私的関係には、国家権力の及ばぬ広大な領域が潜在する。謂わばそこに公権力の弱点があり、権力自身はそのことをはっきり自覚しているし、ウィンストンもそのことに気付いたからこそ、党に対する闘いを密かに意識化できたの

だ。

だが、その細やかな反逆の意志も、党の中核的人物であるオ布莱エンによって、既に七年もまえから嗅ぎつけられていた。

... once—Winston could not remember whether it was in drugged sleep, or in normal sleep, or even in a moment of wakefulness—a voice murmured in his ear : ‘ Don’t worry, Winston; you are in my keeping. For seven years I have watched over you. Now the turning-point has come. I shall save you, I shall make you perfect. ’ He was not sure whether it was O’ Brien’s voice; but it was the same voice that had said to him, ‘ We shall meet in the place where there is no darkness, ’ in that other dream, seven years ago. (*NEF*, p. 188)

(大意——睡眠薬の助けを借りた眠りであったか通常の眠りであったか、それとも白昼夢だったかも知れない、一度、ひとつの声がウィンストンの耳元で囁いた。「心配することはない、おまえは私の保護下にある。七年もの間、おまえを見守ってきた。さあ、いまこそおまえを救い、完全無欠な人物にしてやるべきがきたのだ」それは、オ布莱エンの声だったかどうか、定かでない。だが、その声は、七年前、他の夢のなかで「暗闇のない場所で逢おう」と囁いた声と同じだった)

つまり、識閥下に潜むものも含めて、一切の異端は許されないというわけだ。

そのような密かな闘いにおける唯一の同志ともいえるジュリアは、嘗て彼自身、党のスパイではないかと疑った女性である。それに反し、党に対する反逆の闘いの同志とも持んだオ布莱エンには、最終的に裏切られるだけでなく、彼の手によって拷問を受けることになる。その他、古道具屋の好好爺とばかり思いこんでいたチャリングトン(Charrington)など、彼の間違った判断力が、結果的に彼を破滅へ導いたといえる。勿論、それらはオーウェルの計算した恐怖の世界——究極的には誰一人として信頼できない孤独な世界——を描くための道具立てであった。<sup>32)</sup>つまり、拷問という殆ど抵抗不可能な苦痛を加えられた結果とはいえ、ジュリアはウィンストンを裏切り、ウィンストンはジュリアを裏切る。一切の人間の絆を絶たれ、孤独な闘いを強いられた果てに、彼は未来への希望も奪われ、巨大な党権力のまえに押しつぶされてしまう。

翻ってセント・シプリアンズにおける性的抑圧を考えると、それは学校当局による性の管理・支配になんらかの政治的意味があるというより、その時代のキリスト教倫理に忠実な社会意識の反映と見る方が妥当のようだ。いつの時代でも、性的表現——文字による表現であれ、直接、肉体的な表現であれ——は、まるでこの世に存在しないかのごとく、全て子供の眼に触れない場所におし込められてきた。そして、子供達は教師や大人の目を逃れ、隠微に歪んだ性情報に、密かな興味を掻きたてられるのが常だった。だが、その密やかな興味には、背後にいつも罪の意識が揺曳し、もし、大人達の知るところとなった場合、ひどい羞恥心を味わわされるのはもとより、厳罰を覚悟しなければならなかった。性に目覚めることは、学校教育のなかでは一種の「思想犯罪」なのだ。

教育の役割には、本来、大人になって一人立ちする訓練の意味が含まれている。となると、セント・シプリアンズの教育方針に忠実な子供の行きつくところ、批判精神の欠如した、想像力・創造力のない、性的不感症の人間像が仄かに浮かんで見えてくる。一人立ちとは、なにも経済的自立だけを意味するのではない。借り物でない思考力・判断力の獲得こそ、大人になっていく過程で身に付けるべきものなのだ。ところが、これまで見てきたセント・シプリアンズ

に於ける教育方針を総合すれば、教師に従順な、自分自身で視る眼をもたない、性的な事柄にはひたすら禁欲的であることを期待され、強要されている子供達の姿以外に、どのような子供のイメージも描けはしないだろう。子供同士が学びあう場合は別として、学校場で獲得するものといえば、そのような、むしろ子供の成長にとって負の要素としかいいようのないものが、大手を振ってまかり通っている。この意味で、想像・創造性を軽視し、性教育に戸惑っているわが国の大部分の教育現場は、セント・シプリアンズとそう大きな差があるわけではなさそうだ。

(未完)

## NOTES

- 1) その度合いに程度の差はあれ、多くの批評家達は『1984年』の主たるモデルをソヴィエト社会主義に求めている。cf. John Wesley Young, *Totalitarian Language*, (University Press of Virginia, 1991), p. 232 / David Wykes, *A Preface to Orwell*, (Longman, 1988), p. 146. / John Rodden, *The Politics of Literary Reputation: The Making and Claiming of 'St George' Orwell* (Oxford University Press, 1989), p. 249.
- 2) Irving Howe, *Politics and the Novel* (Books for Libraries Press, 1970), p. 251. オーウェルが同世代にとっては最も重要な作家であっても、次の時代に生き延びることのない作家であろうと、Howeは、ソヴィエト社会主義崩壊の遙か以前に示唆している。
- 3) 一見、この前提から離れた見解がないわけではない。つまり、『1984年』の時代背景を、1943年前後のロンドンに求める見方である。オーウェルがこの作品を書いた前後の事情を考えれば、恐らくその見方は正しい。cf. Stephen Jay Greenblatt, *THREE MODERN SATIRISTS: Waugh, Orwell, and Huxley* (Yale University press, 1974), p. 66. 『1984年』は、未来を予言するユートピア的空想小説ではなく、この作品の執筆当時、特に戦時下のロンドンを背景に描かれた作品であると主張している。/ Isaac Deutscher, "The Mysticism of Cruelty," in *George Orwell: A Collection of Critical Essays*, ed. Raymond Williams (Prentice-Hall, 1974), p. 126. オーウェルの才能と独創性は、彼の風刺がソヴィエト社会主義ではなく、身近な国内状況に向けられているところにあると主張する。/ Sheldon Wolin, "Counter-Enlightenment: Orwell's *Nineteen Eighty-Four*," in *Reflections on America, 1984*, ed. Robert Mulvihill (The University of Georgia, 1986), p. 99. この作品は、西欧社会に内在し、同時に、いまにも起こり得る歴史に根ざしていると主張している。/ Valerie Meyers, *George Orwell* (Macmillan, 1991), p. 123. この作品に籠められた風刺が、東欧共産主義だけでなく、民主主義を危うくする戦時下の統制にも向けられていることを指摘している。オーウェル自身、戦後の冷戦構造が、半永久的につづく可能性を指摘していないわけではないが (*CEJL*, IV, p. 371)、直接、彼の心を悩ましたことは、イギリスの全体主義化の可能性であった。だが、冷戦下を生きた多くの人びとにとって、どこか予言めいた題名が、東西の対立と二重写しになっていたのも、強ち無理からぬことだった。その意味で、Roddenが指摘するように、『1984年』はそのタイトル故に、世間の注目を惹いたのであり、もし、最初、考えていたように、『ヨーロッパ最後の人』というタイトルであったなら、これほどまでに世の注目を惹くことはなかっただろう。(John Rodden, *The Politics of Literary Reputation*, p. 96)
- 4) John Rodden, *The Politics of Literary Reputation*, p. 95. Roddenは、オーウェルが戦後の激動を、直接、経験したなら、こうした現象は決して起こらなかったという。もし、その変動を生きたなら、一つひとつの事件に対して、彼の立場は否応なくはっきりさせられることになるからだ。
- 5) *CE*, p. 440.

- 6) Stephen Ingle, *GEORGE ORWELL : A Political Life* (Manchester University Press, 1993), p. 95.
- 7) 極端な例として、「この作品は小説などではなく、恐怖に満ちた物語と政治論文を掛け合わせたもの」という主張がある (Richard J. Voorhees, *The Paradox of George Orwell* (Purdue University Studies, 1971), p. 60)。政治論文といういい方は受け入れ難いにしても、「なにか欠陥があるとすれば、それは反全体主義を教宣する必要があったからだ」という彼の主張は納得できる。
- 8) Daphne Patai は、旧来の現代史的コンテクストから離れた読み方として、オブライエンからウィンストンに仕掛けられたゲームとして読むことを提唱している。“Gamesman ship and Androcentrism in *Nineteen Eighty-Four*” in *George Orwell's 1984*, ed. Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1987), pp. 47-63.
- 9) B. Crick が示唆するように、第一稿はずっと早い時期 (1938年頃、或いは戦争が始まった頃) に書かれた可能性がある (*GEORGE ORWELL : A Life*, [Secker & Warbug, 1980], p.365) としても、その進学予備校での経験が、この作品に色濃く投影されていることは確かだ。更に、彼が指摘する通り、「全体主義」の概念は、1936年以降、認識された概念であり、セント・シプリアnzの体制は、専制的な形態と見るべきであろう (p. 31)。
- 10) *Ibid*, p. 30.
- 11) Anthony West, *New Yorker* (28 January 1956) in *GEORGE ORWELL : The Critical Heritage*, ed. Jeffrey Meyers, (Routledge & Kegan Paul, 1975) 彼の「隠された心の傷 (a hidden wound) を想定して初めて、この作品の冷酷無惨なペシミズムが納得される」という主張は (p. 79)、この作品の特徴の一面を表現している。だが、「『1984年』は、セント・シプリアnzでの経験をそのまま拡大したもの」という主張が背後に窺えるとき (p. 78)、この作品を余りにも精神分析的解釈に矮小化しているといわざるをえない。
- 12) ソヴィエト連邦崩壊を視野に入れた批評家は、いまのところ Stephen Ingle ただ一人である。彼の主張によると、「消費、生産、宣伝、商業、消費者文化、といった遍在的な独裁制に人間性の再発見などありえないし、市場経済に立脚している限り、地球規模の環境汚染のような問題に、解決策を見つけることも容易ではない。いまこそ計画経済という社会主義の知恵が生かされるべきであり、オーウェルのいう人間としての品性に基づいた政治学が見直されなければならない」 Stephen Ingle, *GEORGE ORWELL : A Political Life*, pp. 131-3.
- 13) Irving Howe, *Politics and the Novel*, p. 250.
- 14) John Wesley Young, *Totalitarian Language*, p. 54.
- 15) 革命二周年記念日の写真、赤軍指導者として白軍打倒部隊の出発に立ち会ったときの写真から、見事にトロッキーは消されている。
- 16) ニュースピークを言語学的に論じた数ある批評家のなかで、John Wesley Young は、全体主義とその言語分析の必要性を強調し、この作品を政治理論として読もうと試みている。彼によれば、オーウェルの言語観には、相対立するふたつの前提がある。ひとつには、言語と思考は分かちがたく結びつき、言語が思考過程に決定的な影響を及ぼす、という考え方。もうひとつは、言語は使う人の目的によってどうにでもなる道具である、という考え方のふたつである。(John Wesley Young, *Totalitarian Language*, p. 29) これを矛盾と考えるのではなく、使い分けと考えることはできないであろうか。即ち、前者は被支配者側の言語と思考の関係を説明しているし、後者は支配者側の「支配の道具としての言語」を説明していることになる。
- 17) 基本的に Basic English の考え方に通じるが、この作品においてオーウェルは、自然言語に対する人口的言語として、ニュースピークを考えると、Basic English を念頭に置いていたことは間違いない。Crick によると、ローマ・カトリック教会、ボーイ・スカウトなども風刺の対象とされている。Bernard Crick, “Reading *Nineteen Eighty-Four* as Satire ” in *REFLECTIONS ON*

AMERICA, 1984, ed. Robert Mulvihill.

- 18) ヴェトナム戦争当時、「和平工作」(pacification)という語句が、実際の意味とはかけ離れて使用され、「ゲリラの鎮圧」を意味するに至った経緯がある。(Cf. Roy Harris, "The Misunderstanding of Newspeak," in *George Orwell's 1984*, ed. Harold Bloom, p. 90)
- 19) オーウェルのいう言語は、語彙の問題に矮小化されている感が強い。語彙を減少させることによって、思考を支配するというのは、實際上、殆ど不可能であろう。しかし、厳密に言語学的検討を加えて、その欠陥を論っても余り意味がない。ニュースピークは言語学的操作によって思想を支配しようという欲求のパロディなのである。(David Wykes, *A preface to Orwell*, pp. 84-6)
- 20) *CEJL*, Vol. IV, p. 336.
- 21) *Ibid.*, p. 339.
- 22) *Ibid.*, p. 344.
- 23) *Ibid.*, pp. 336-7.
- 24) 松村明(編)、『大辞林』(三省堂、1989)
- 25) John Wesley Young, *Totalitarian Language*, pp. 53-4.
- 26) *CEJL*, Vol. IV, pp. 351-5.
- 27) Richard J. Voorhees, *The Paradox of George Orwell*, p. 80.
- 28) Stephen Ingle, *GEORGE ORWELL: A Political Life*, p. 117
- 29) Valerie Meyers, *George Orwell*, pp. 135-6.
- 30) ウィンストンとジュリアの性的関係が、この作品の数ある失敗のなかで最も深刻な失敗のひとつに数えられる、という Raymond Williams の主張は、その関係に籠められた政治的側面を故意に無視しているように思われる。それにしても、彼のいうように、ウィンストンの性的喜びに相手の性的墮落が必要であるという論理は、極めて普通の男女間の貞節を考慮の対象外にしてしまっていることは確かだ。(Raymond Williams, *Orwell*, Fontana/Collins, 1978, pp. 80-1)
- 31) ジュリアの描き方については、さまざまな批判がある。その典型は、「ウィンストン以外の登場人物には主体性が感じられない(faceless)」という主張である。(David L. Kubal, *Outside the Whale* [University of Notre Dame Press, 1972], p. 131) しかし、ジュリアの描き方に、多少、問題があるにしろ、この非難は妥当性を欠いている。というのも、『1984年』の世界はまさに顔のない世界だからだ。もうひとつの典型は、フェミニズムの立場からの批判である。(Daphne Patai, "Gamesmanship and Androcentrism in *Nineteen Eight-Four*" in *George Orwell's 1984* ed. Harold Bloom, p. 84) 一方、David Wykes は、従来の補助的なジュリア解釈ではなく、『神曲』における Beatrice の役割を彼女にみている。(David Wykes, *A Preface to Orwell*, pp. 139-45)
- 32) 主人公は周囲の標準的な生き方に反抗するが、結局はそこにひき戻されたり、その反抗のため破滅したりするのは、オーウェルの作品に一貫して流れる様式である。(Raymond Williams, *Orwell*, pp. 45-6.)

\* テキスト引用は、全て SECKER & WARBURG (1984) を使った。